

法隆寺百万塔および陀羅尼經の調査

平城宮跡発掘調査部・歴史研究室

1 百万塔の調査

考古第一調査室は、史料調査室とともに法隆寺所蔵百万塔の調査を継続中であるが、本年度はコンピューター処理を目指して塔身部のデータを40項目に整理・記号化し、2,000基分のデータをIBM 5550に入力、本格的な検索処理を開始した。

また、百万塔の製作技術上の問題点を解決するため、百万塔の復原製作を行っている小西木地工房（富山県東礪波郡市川町青島）で、製作技術の調査を行った。

百万塔の製作 小西久夫氏

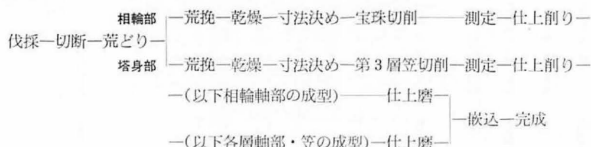
同工房の百万塔の製作は相輪部・塔身部ともに電動轆轤で挽き出すもので、その工程は、別表の如く10数工程と比較的簡単である。まず、荒挽の段階で塔身の陀羅尼經収納孔と、これに見合う相輪の基部を削り、アゲ挽の段階で、塔身は第三層の笠から、相輪は宝珠から、以下部分ごとに、削りと測定を繰返し成形する。仕上げの磨きは最終的に全体に行うが、仕上げの削りは各部分ごとにその都度行っている。使用工具はバイト類、ノミ類、ノグス、ゲージなど27種におよぶが、轆轤切削に一般的な工具や簡単な道具が多い。1基当りの製作時間は、いずれも30分程度である。製作は、塔身部が比較的容易なのに対し、相輪部が複雑な形態をとるうえ小型で、使用工具数も多く、高度の熟練技術を要する。

小西工房の百万塔は、電動轆轤を用いること、ケヤキを材料に用いること、相輪部、塔身部とも軸の装着には嵌め型を用いることなど、法隆寺百万塔と異なる点も多いが、今後の製作技術の復原に参考とすべき点が多い。なお、精密な相輪部の製作は、奈良時代の幼稚な横軸轆轤では不可能とし、旋盤の存在を推定する説もあるが、今調査によって、熟練技術があれば通常の横軸轆轤でも相輪部の製作は十分可能、との見通しを得た。百万塔の製作技術の復原を目指し、今後も調査を続ける予定である。

(金子裕之)

百万塔の製作工程

小西木地工房



2 百万塔陀羅尼經の調査

法隆寺百万塔に納入されていた陀羅尼經の調査を、昭和資財帳作成の一環として行ったものの中間報告である。百万塔納入の陀羅尼經は、現在ではすでに百万塔本体からはとりだされて別置されている。従来からその所在のあきらかであったもの1,800点余(断片を除く)と、今回、昭和資財帳の調査に伴って、新たに発見されたものとを合計すると4,500点をこす数になる。

これらの陀羅尼經は、従来からの研究によって、4種類の經典、無垢淨光經根本陀羅尼、同相輪陀羅尼、同自心印陀羅尼、同六度陀羅尼からなっていることが知られており、また版式については、根本陀羅尼が3種類、相輪、自心印、六度陀羅尼がそれぞれ2種類ある。今回の調査でも、この經典の版式の種類については特に新しい知見を得ることがなかった。

現存する陀羅尼經は、保存の良好なものも多いが、断簡で保存状況の悪いものもまた数多く、点数として数えにくいものも多数あった。これらの陀羅尼經について、經典・版式等によって分類すると同時に、法量の採寸、注記すべき事項等について可能なかぎり1点ごとに、調査を作成し、写真撮影を行った。この調査の経過であきらかになったことを、以下に摘記することとする。

1. 版式については、とくに新しい型式のものの発見はないが摺り上りは多様であり同一版と思われるものでも、文字の細い太いにかなりのバラツキが存在する。このような現象がなぜ生じたのかについては詳らかにしない。

2. 料紙の種類については、ほとんどが麻紙であるが、その中にも二種類の異った紙質が存在する。この紙質の相違については、なお後日、科学的な調査を試みる必要がある。

3. 紙の縦寸法は4.7cmから6.2cmまでぐらいいはばでかなりのバラツキがあり、正確に裁断したものではないようにみえる。

4. また、ごく一部の經典には、上縁ないしは下縁に本文以外の墨痕を残したものがある。そのうち相輪陀羅尼の短いものに付いた墨痕は、比較してみた結果、同じ相輪陀羅尼の長い版式の本文の下端であることが判明した。この結果、陀羅尼經を摺るために使用した版式は經典1種のみが刻まれていたのではなく、少なくとも同一經典の2種類の版が同一板に刻まれていた可能性のあることが確認された。それ以上に版が大きく3種類以上の經典が同一板に刻まれていたものであるかどうか、あるいは一版一經でスタンプ式に印刷されたのかはなお不明である。おそらく、同一版で一紙に摺り上げられたものが、後に上下に裁断されたとするのが可能性が高い。その際、本文以外の墨痕までふくめて切りとられたものが生じたものと思われる。

5. この他、摺りのよくない部分については肉筆による補筆が行われており、この点数はかなりの数にのぼる。残簡中、本文全体が肉筆のものが1点みいだされたが、今日知られている肉筆のものは指定品中に3巻ある。今回発見のものは断簡であるため全文肉筆の例に加えてよいかどうかは判定できない。

(鬼頭清明)